

## シンポジウム：「超越」と倫理学

品川哲彦（関西大学）

森田美芽（大阪キリスト教短期大学）

一九九四年の関西倫理学会大会シンポジウムのテーマは「倫理と宗教」であった。ほぼ四半世紀を経てふたたび宗教に関係するテーマをとりあげる。ただし、テーマは「『超越』と倫理学」とした。倫理と宗教との関係をなにか外在的なものと捉え、たとえば、いくつかの有力な宗教の教条とそれに対応する倫理理論を並置したり、あるいは、宗教の社会的な貢献を、したがって倫理的な有意義性をとりあげたりするのではない。いずれの宗教も人間を超越するものにふれる営みである。それでは、はたして人間を超越するものについての思索は倫理学にも関わるのか、倫理学がこれに関わるとすれば倫理学は宗教とどのように違ったしかたで関わるのか、ひょっとしてその思索は倫理学にとっても不可欠なのか、はたまた、超越についての思索は倫理学にとって不要なものなのか、それどころかむしろ害となる要素なのか。こうした倫理学にとってのまさに内在的な問題に踏み込もうと考えて、「『超越』と倫理学」というテーマにしたわけである。

だが、現代の倫理理論には宗教は「疎遠」に思われる。まずはその事情を確認し、しかしそのあとで、その外見にかかわらず、このテーマが（古典的なテーマがつねにそうであるように）今なお現在の問題であることを示そう。

現代の価値多元社会では、異なる価値観をもつ人びとが社会のなかで共存して生きていけるようにするために、特定の価値観に立脚する主張は——したがって、特定の神学にもとづく主張はもちろん、形而上学とみなされる思索に依拠した主張も——社会の構成員の共有するものとはなりえない。したがって、倫理学の第一の目標は、（ヘーゲル的な意味での）「道徳」の探求にあることになり、それに応じて、倫理学の則るべき方法は普遍的な妥当性を要求しうる考察に求められることとなる。

これにたいして、どの宗教を信じるか、そもそもどの宗教にも関わらずに生きるかということ、その本人が「よい」と考える生き方の追求に属し、したがって、「道徳」と対比された「倫理」の問題とみなされる。もちろん、それを単純に個人の心の問題だというふうに片づけるのはむずかしく、同じ宗教を信仰し同じ価値観を奉じる人びとが政治的な意味でも力のある集団を構成して内政を左右したり、あるいはそのなかの一部の原理主義者がテロ行為に走ったり、さらにはひとつの国家が特定の宗教を奉じて他国と対立したりというふうに、現代社会では宗教が社会的共存を脅かす要素にもなっている。しかし、その対立や抗争等の直接的な現実や特定の宗教現象の背後にある社会的状況には、政治や経済が大きく影響しており、その分析は倫理学に無縁でないものの倫理学独自の主題とはいえない。しかも、対立や抗争を排除するための倫理的提案は、国内においても国際間においても、異なる価値観の人びとが共存できる前述の「道徳」に訴えるものとならざるをえない。

以上の経緯からすれば、宗教は倫理学にとってせいぜい副次的なテーマであり、たとえば共存のために彼我をよく知る意図から異なる宗教とその倫理理論を並べて論じる平和なシンポジウムの企画が立てられる程度の扱いをもって遇せられることとなりがちだ。

しかしながら、倫理学の歴史を振り返れば、宗教——というよりも、個別の宗教の枠組みから離れて考えるために、「超越」という概念を用いるが——は、理性を基盤としてきた近

代の倫理学にあっても、倫理理論の核に関わる問題だった。その一例はカントにみられる。カントでは、超越的なものは理論理性（思弁理性）では証明されないと説明され独断論的な形而上学を論駁すると同時に、しかし超越的なものは理念として人間の生にとって根底的な意味をもつ。理論理性では因果系列の全体である世界という理念がさらなる科学的探究を進める契機となり、理論理性では解決できない問題である自由、神の現存、魂の不死が実践理性においてとりあげられ、それらがわれわれの生を有意味なものにすると指摘される。そこに彼の形而上学的思索の積極的な意味がある。経験されうるものは経験されうるものだけで充足されることはなく、経験のなかに現象することのない超越的なものが、経験されうるもの全体に意味を与え、それが成立する基盤を与えているという思索である。

こうしたカントの思索についてその形而上学的思索にではなく社会的共存を可能にする条件としての「道徳」に焦点を当てたヘーゲルは、「道徳」では到達しえない社会の構成員相互の融和を「倫理」に託し、理性の自己発展の過程のなかにこれらの問題を置くことによって壮大な理性の体系ないし物語を築き上げた。

ただし、本シンポジウムは以上の歴史をすでに前提として扱い、一九世紀以降を扱う。

ヘーゲルの体系に反対して、キェルケゴールは「倫理的 - 宗教的」実存における神とひとの差異を強調し、人間にとって普遍的な倫理の立場と、それと和解しえない個の自己意識に発見される宗教の立場の差異を固持する。キェルケゴールにとって、また宗教的なものにとっての「宗教性 A」の重要性は、「愛のわざ」における愛の「義務」性や普遍性などにおいて問われている。

ニーチェは神を軽視できる問題と考えなかったからこそ神の死を宣言した。彼は、キェルケゴール的な神の想定を否定し、しかしなお「超越」について語っている。すなわち、「超越」は人間のなかでの超越となるのである。人間を超越する存在という意味での超越者なきこの超越の観念は、神の存在を否定するタイプの実存主義に引き継がれる。

二〇世紀に人類はもはや宗教の説く救済が信じられないほどの熾烈な経験をやるが、その二〇世紀の悲惨と直面しながら、レオ・シュトラウスは神学と公共的なものとの関わりをその政治哲学のなかで展開した。

二〇世紀後半にハーバマスは次のように指摘している。宗教的な教説を背景に築き上げられてきた人間性を、宗教的な背景がなくても生き生きと保つことができるだろうなどとけっして思ってはならない、と。とはいえ、これには反論があるだろう。特定の宗教に依拠した思索、そうでなくても形而上学に依拠した思索、いや人間に普遍的に備わる理性に依拠した思索すら不要だ、重なり合う合意で倫理理論を基礎づけることはできるし、いまやそれしか可能性はない、と。しかし、この反論がまだ決定的な勝利をおさめていない以上、超越の問題は依然として現代のアクチュアルな問題なのである。

シンポジウムには、藤枝真氏（大谷大学）にキェルケゴールを中心に、竹内綱史氏（龍谷大学）にニーチェを中心に、石崎嘉彦氏（大和大学）にレオ・シュトラウスを中心に提題していただく。それぞれの方のご報告については、その発表要旨をご覧いただきたい。